



神の行動指示書



川路 新吉

神の行動指示書

あの交差点を左折する。

男は手元の指示書を見つめた。

とうとう最後の指示だ。

指示の通り交差点を曲がると、そこには見覚えのある紳士がたたずんでいた。最初に会ったときと変わらず上品なスーツを身にまとっていた。

男に気づいた紳士は、丁寧に頭を下げた。

「お久しぶりでございます」

「お久しぶりです。あなたのおかげで私は成功することができました」

男と紳士の出会いは一年前にさかのぼる。

そのとき、男の人生はどん底にあった。手持ちの金は底をつき、周りの人間はみな彼から離れていった。

もうたくさんだ。男は絶望して、焦点の定まらない目で駅をさまよっていた。電車にとびこんでやろう。そう思っていた。

顔を上げると構内の壁に大きく掲げられた、雑誌の広告が目に入った。大手出版社が発行している経済雑誌だ。そこに見覚えのある顔を見つけた。数カ月前まで男と一緒に仕事をしていて、そして男から全てを奪っていった男、クボタだった。その満面の笑みの下には「スーパーコンピュータで世界を切り拓く！」とある。いろいろ手広く始めたようだ。

クボタの顔を見て怒りがこみ上げてこないと言えは嘘になる。しかし復讐する気力はとうに消え失せていた。死んで呪ってやろう、今の自分にはそれぐらいしかできない。男は力ない足取りで券売機に向かった。

紳士に話しかけられたのはそのときだった。なげなしの金で入場券を買おうとしていた。ホームで電車にぶつかるための。

「幸せになりたくはありませんか」

見知らぬ人間の不躰な質問がカンにさわった。

「何者だ、お前は。消えろ」

しかし、男の剣幕を意に介さず、紳士は話をつづけた。

「不審にお思いになるのはしょうがありません。しかし、死ぬのはお待ちいただけませんか？あなたにはせねばならないことがまだありますよ」

そう言って紳士は一枚の紙を渡した。紙には一番上には無機質なフォントで『行動指示書』と書かれていた。

「騙されたと思って、そこに書いてあることをやっごらんさい」

そう言うと、紳士は男の前から姿を消した。

なぜ、こんなうさんくさいものに従う気になったか、今思うと不思議だ。しかし、今はそのときのきまぐれに感謝している。

『行動指示書』に記載された行動は、いずれも簡単であるけれどもいやに具体的なものばかりだった。

○月○日に△△公園のベンチに座る。であるとか、○月○日に駅前の立ち食いそば屋でたぬきそばを食べる。であるとか。

共通点は男が普段ならやらないことばかりということだった。

その効果は絶大だった。指示書に書かれた単純な行動を一つ一つこなしていくたび、男の生活は良い方向に向かっていった。

男は社会に復帰し、人間らしい生活を取りもどした。

「クボタすまないな」

そして、『行動指示書』が最後に近づいたころ、男は自分をどん底におとし入れたかつての友人を見下ろしていた。

果たしてあの紳士は何者だったのだろうか。男は自分に起こった奇跡の数々を思い出してあの紳士は神様なのかもしれないと半ば本気で思っていた。

指示書の最後には、○月○日、○△交差点を左折すること、そして行動指示書の代金を払うことが指示されていた。

男は手に持ったカバンをそのまま紳士にわたした。『行動指示書』に対する代金だ。金額もご丁寧に記載されていた。

「こんなに安くてよろしいんですか？」

「何をおっしゃっているのですか」

紳士はおかしそうに笑っている。

「あなたが今お支払いいただいた金額は、私とお会いしたときには、高く支払えるはずがないと思っていた金額ではないですか」

紳士はカバンを開け、金が入っていることを確認すると、「では」と軽い挨拶をしてその場を立ち去ろうとした。

「すみません」

男はあわてて紳士を引き止めた。

「あなたは何者なんですか？」

紳士は立ち止まると、少しのあいだ困った顔をしていた。やがてこういった。

「あなたは選ばれたのです」

選ばれた？男は紳士の顔をじっと見つめ、次の言葉を待った。

「運命というのは、ほんの少しのことで変わります。あなたはすでにご経験されたはずですよ。交差点でいつもと違う道に行く、立ち食いそば屋でいつもは食べないたぬきそばを食べる。そんなささいなことでも人生が変わっていくのを」

男は手元の『行動指示書』を見つめた。人生を変えてくれたただの紙切れを。

「世界にとって有益とわれわれが判断した人間を幸せにする、そうすることで世界を再生させる。それがわれわれの仕事なのでございます」

男は紳士の言葉に興奮していた。やはりこの紳士は神なのだ。自分は神に選ばれた人間なのだ、そう思った。

「きっともうお会いすることはないでしょう」

紳士はそう言うと、男の前から姿を消した。

「ただいま戻りました。実験終了です」

そう言いながら部屋に入ってきたのは、上品なスーツをきた男だった。

部屋の中にはもう一人男がいた。研究員のような出で立ちのその男は、中央に配置されているコントロールパネルに向かってなにかしている。

「どうだった」

コントロールパネルの画面を見つめたまま研究員風の男がそう言うと、スーツの男は手元のカバンを広げて中身を見せた。カバンのなかにはぎっしりと札束が詰め込まれていた。

「金を渡すとき、渋ったか？」

「いえ、全然。むしろこんなに安くてかまわないんですか？と仰ってくれましたよ」

「上出来だな」

そう言いながらも、男はコントロールパネルに何かを入力している。

コントロールパネルは少し離れたところに存在するスーパーコンピュータにつながっていた。コンピュータは数千基のユニットからなり、世界のさまざまな事象が変数として入力されている。その性能は公表されている世界一位のスーパーコンピュータの数千倍ほどはあるだろう。目的は未来予測シミュレーション。

「シミュレーション通り目障りなクボタもつぶれてくれましたしね」

スーツの男はコントロールパネルに腰掛け笑いを噛み殺すように言った。

「ああ、あたらしいシミュレーション結果ではクボタがわれわれを脅かす確率はなくなった」

コントロールパネルの画面は、たくさんの数字が踊っていた。

その画面を見つめて、研究員風の男は不敵な笑みを浮かべた。

「もうすぐだ。我々の望む世界まで」

研究員風の男のすぐ横で、コントロールパネルに搭載されたプリンタが、かたかたと何かを印刷していた。

プリンタから少しはみ出した印刷中の紙の頭には、無機質なフォントで『行動指示書』と書かれていた。

神の行動指示書

<http://p.booklog.jp/book/39513>

著者：川路 新吉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/bowmoq/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/39513>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/39513>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.